

《2003年9月例会－出張サロンin大分報告》

9月の例会は、9月24日の「出張サロンin大分」でした。その概要を、翌日の「日本フットボール学会設立シンポジウム・総会・懇親会」とあわせて簡単に報告します。なお、報告者（中塚）からの視点であることをあらかじめご承知おきください。

■ 1. 大分の第一印象

飛行機の中で中村淳君と合流し、生まれて初めて大分に降り立ったのは24日の1時30分頃。空港からは、時間のかかるバスでなく、これも生まれて初めて「ホーバークラフト」に乗って海を横切ることにした。しかし、空気圧で浮上しているくせに「なんやこの揺れは～！」というぐらいの大揺れで、何度弁当が吹っ飛びそうになったことか…。これが大分の最初のできごとであった。

約束の大分駅前で宮明さんと落ち合うことができたのは14時30分を回っていた。

■ 2. インタビュー①皇甫 官（ファンボ・カン）氏（その1）

最初のインタビューの相手は、大分トリニータU-18監督のファンボ・カン。90年イタリア大会のスペイン戦で見事にFKからゴールを奪った元韓国代表選手は、ソウル大学を出てKリーグで活躍し、その後大分に来て早9年となる日本語ペラペラの好青年である。いろんな観点からものごとを見ることができる貴重な人材との評判通りの人物であった。

「2002年ワールドカップは何を残したか」が今回のインタビューのテーマである。まずはファンボ氏が指導する「大分トリニータユースのプレーヤー」や「大分県のサッカー」、あるいは「九州のクラブユースサッカー」に何を残したか、そしてさらに、「韓国サッカー（特にユース年代）」に何を残したかという観点から質問した。

大分トリニータU-18については、「一流選手の試合を見て目が肥えた」ことや「ピッチ外の情報が多く入り、ワールドクラスの選手のあり方をイメージできるようになった」こと、そして「施設が充実した。芝のグラウンドが増えた」ことを指摘された。大分県では4ヶ所のトレーニングキャンプをつくり、別府市2面、大分市2面、犬飼町2面、三重町1面、佐伯市2面、中津江村3面の芝ピッチが新設された。これにより、今では少年サッカーも、準々決勝以上は芝でできるようになるなど、サッカー環境が大きく改善された。クラブユースの大会は従来から芝でやっていたが、大分でこれだけの芝ピッチが生まれたことによる影響は大きいという。

このあと、韓国サッカーの話もお聞きしたが、飛行機の遅れとファンボ自身の急用とで30分間しか時間をとることができず、翌日改めて伺うことにした。

■ 3. ビッグアイ見学

宮明さんの車で大分トリニータの練習場へ行ってみると、ちょうど練習の準備をしているところだった。ビッグアイ近くにある、県所有の芝のグラウンドである。クラブハウスも県の施設を借りているらしい。あたり一帯は、2008年の大分国体に合わせて、県の総合スポーツ施設として整備されている。グラウンドの周りには、雨にもかかわらず、サポーターが数十名（いつもはもっと多いらしい）来ていた。

ビッグアイは「風が通らない」という致命的な欠点を持ってはいるものの、いろんなところに工夫が凝らされ、大変見応えのある見学であった。ピッチを借りるのも、一般9,100円、高校生以下4,550円（いずれも1時間あたり）と安価で、県が県民に広く開放しようという意図が伺える。

ビッグアイの外側は1周800mだそうで、高校の陸上部員が走っていた（部活動の時間になっていた）。ダッシュしながら見知らぬおじさんに「こんにちわ！」と律儀に挨拶する高校生には、「ダッシュしてるときは挨拶せんでええぞ」と思った。都会の高校生との違いをこんなところにも感じた。

■ 4. インタビュー②友成義朗氏

17時過ぎに鶴崎工業高校に着き、大分県高体連サッカー部長の友成氏に話をお聞きした。「2002年ワ

ールドカップは何を残したか」という、高校サッカー年鑑の特集記事のための取材である。

友成氏は、2002年へ向けて大分県が、90年代に入ってから様々な準備を進めたことが、大分県のサッカー・スポーツ環境を大きく変容させたことを指摘していた。それは、プロサッカークラブの誕生、県単位の選手育成の取り組み（それまでは単独チームの強化に終始していた）、大分県サッカー協会事務所開設、施設の整備など多岐に及ぶ。

ワールドカップの時は、大分県高校選抜がカメルーンと練習試合をするなど、トップレベルの練習や試合に触れることができたことが、サッカーをする者にとってもそうでない者にとっても大きな経験になったという。

大会後に残された芝のグラウンドは、各種大会で有効に使用されている。中津市の市営サッカー場が1日1000円、中津江村も1日3000円で借りられるという安価な設定が、いろんな大会の誘致につながる。JクラブやKリーグのクラブもキャンプに来るようになったし、今年から始まったプリンスリーグでも、全試合を熊本と大分で消化したらしい。本来のリーグ戦のあり方からすればどうかとも思うが、それだけ芝のグラウンドが充実しているということである。

高体連でも、選手権は3回戦から芝のグラウンドで行えるようになり、ラグビーも芝でできるようになった。施設の整備はこれからも進み、それが大分のサッカーシーンを、トリニータとともに変えていることを感じた。

■ 5. 情報交換会－出張サロンin大分

狭い意味ではこれが「出張サロンin大分」となるろう。大分県サッカー協会の事務所（1993年に自前の事務所を持った）には、我々が到着したときにはすでに地元の方が集まっていて、そこで2時間弱、さらに場所を変えて飲みながらと、充実した時を過ごすことができた。

【日 時】2003年9月24日（水）19：30～21：20（その後近くの居酒屋で懇親会）

【会 場】大分県サッカー協会事務所

【参加者（会員）】中塚義実 中村淳 宮明透

【参加者（会員以外）】五所睦雄（大分県サッカー協会フットサル委員会事務局長・クラブづくりプロジェクトリーダー） 羽田野さん（アトレチコ大分フットサルクラブ） 松下潤（筑波大学OB。クラブづくりに関心あり。長崎県在住） 森山信浩（クラブづくりプロジェクトの事務局的な方。庄内町で社会人チームの運営と少年チームの手伝いをされており、そのあたりをクラブづくりの手がかりにしていきたいと活動中）

【テーマ】（大分に）いかにクラブを育てるか

1) 話題提供（中塚義実）

①ネットワーク型クラブとしてのサロン2002紹介

②DUOリーグから東京都ユースリーグまで－リーグ戦がクラブを育てる

③まとめに代えて－できることからはじめよう！

2) ディスカッション（飲み会も含む）

「クラブをつくろう」という話になるとどうしても、「規約の整備」や「クラブの枠組み」の話になるが、何のためにクラブを創るのかというと、それは「活動する」ため。だから、「できる範囲で小さく立ち上げ、とにかくはじめることが大切。時間をかけて徐々に大きく育てていけばいい」。その際の「活動」は、必ずしもスポーツを「する」には限定しない。「みる」「語る」「ささえる」も含めた多様な活動が展開できる時間と空間の確保が大切。「クラブハウス」の機能をどこが持つかがかぎ。

こんな話を、大分や長崎の現状を聞きながら、ビールと焼酎を飲みながら、「トリ天」なる料理（トリの天ぷら。これがうまい！）を戴きながら語り合った。

その後、中塚、中村、松下の3名は、この日の宿である「豊の国健康ランド」のサウナで汗を流し、更に一杯飲んでから床についた。密度の濃い、充実した一日であった。

■ 6. インタビュー③皇甫 官（ファンボ・カン）氏（その2）

昨日の続きを、大分トリニータの事務所（サンサン通り沿いにある。クラブハウスとは別）で行った。

昨日は「大分県の」もしくは「大分トリニータの」ユース年代に何を残したかが中心であったが、今回は「韓国サッカー」「韓国社会」を中心にお聞きした。

非常に貴重な、「へ〜」という話をいっぱいお聞きした。2002年へ向けて進めてきた韓国サッカーの改革は、徐々に成果を上げつつある。2000年に打ち出した「ビジョン」は日本サッカーをモデルにしたもので、ユース年代育成、指導者養成、施設の充実を謳ったものであり、これに沿って韓国サッカーの改革が進められているという。

2002年大会の影響として、次のようなことを指摘された。

1) スポーツ環境

- ・芝のピッチができて、スポーツ環境が変わった（これまでは土のグラウンドばかり）

2) 国民の意識

- ・自然に下から盛り上がった → 市民意識の高まり
- ・サッカー選手でも飯が食える。大学進学が全てではない → 進路選択の幅の広がり

3) 世界的なスポーツとしてのサッカーを国民が知り、体感した

- ・スポーツの真の楽しさを知る → スポーツ観の広がり
- ・世界を知る → 自分たちの国を客観視するようになる

この他話題は多岐に及んだが、別の機会に報告したい。

■ 7. 大分から熊本へー宮明透氏について

宮明号と松下号で、阿蘇山のド真ん中を突っ切って熊本へ移動した。約3時間の移動の車中は、宮明さんとの貴重な意見交換の場であった。

もともと新日鉄で働いておられた宮明さんは、「社会人を教育現場へ」という動きの中で、大分高等専門学校の教員になる。その一方、大分トリニティに設立時から関わり、現在はトリニータのボランティア事務局長。大分県サッカー協会でも女子委員長を務められたことがあり、サッカー界で多忙な日々を送られている。加えて、トリニータのホームゲームをNHK大分で放送する時には解説者としてテレビ出演されるし、FM大分で30分のレギュラー番組を持ち、市民にメッセージを送られている方である。なぜそうなったのかは「自分でも不思議」らしく、宮明さんの歩みとネットワークの広がりを説明すれば、大分県のサッカーの近年の発展をだいたい説明できるのではと思うぐらい幅広く、楽しい方である。

出張サロンで全国のこうした「熱い」方にお会いできるのが本当に楽しみである。サロン2002の使命は、2002年以降も続く、こうしたネットワークづくりにあるように思う。

■ 8. 熊本にてー日本フットボール学会

車が混んでいたこともあって、熊本大学の会場に着いたときにはシンポジウムが始まっていた。遅刻である。ごめんなさい。宮城修氏（防衛大）によるゲーム分析の話の途中から参加し、布目寛幸氏（名古屋大学）・浅井武氏（山形大学）のバイオメカニクス、安松幹展氏（立教大学）の生理学、清水諭氏（筑波大学）の社会学、そして戸苅晴彦氏（平成国際大学）による日本のフットボール研究の歴史のレビューがあり、最後に山下則之氏（Jリーグ）がJリーグアカデミーの立場からみたフットボール学会への期待が述べられ、シンポジウムは閉幕した。心理学の話題がなかった（同時刻に心理学の研究会があったためか）のと、他のフットボールの話題がなかったのが残念だったが、地元のテレビ局も来て翌日のニュースで取り上げられるなど、盛会であった。総会も無事終了し、大橋二郎会長（大東文化大学）、長浜尚史理事長（亜細亜大学）体制でスタートすることとなった。

場所を変えて行われた懇親会にも60名以上が参加された。なぜか司会役を務めることになった私は、「誰に話をしてもらおうか」と企画を練りながら気持ちよく飲んでいた。突然の依頼にもかかわらずスピーチしてくださった方、ご協力ありがとうございました（スピーチ順。敬称略）。

浅見俊雄（J I S S）、中山雅雄（長崎大学）、里内猛（日本代表フィジカルコーチ）、早川直樹（日本代表トレーナー）、山本浩（NHKアナウンサー）、宮明透（大分トリニータボランティア事務局長）、小沢治夫（北海道教育大学釧路分校）、有本健（ロンドン大学）、堀川雅美（関西学院大学大学院・唯一の女性参加者）、永島正俊（元日本大学）、松本光弘（筑波大学）、長浜尚史（亜細亜大学）

ついでながら、当然のごとく2次会に出かけ、さあホテルへ帰ろうかと思ったら、そこでばったりS大のI氏とH大のN氏（さあ誰でしょう）に会って3次会となり、ホテルに戻ったのは4時でした。

■ 9. 熊本にてー熊本城

最後に26日、同じホテルだった飯田義明氏（専修大学）と熊本城を見学してから帰路につくことにしたが、天守閣館内の博物館をくまなくみただけでなく、最上階にいたガイドのおじいさんと、櫓の最上階にいたおじいさんにいろいろ話をお聞きし、大変収穫の多い小旅行になった。以下はその概要。

★加藤清正がつくった熊本城は守備に長けた工夫が随所に施されている。細川の時代にあっても安泰であったが、西南戦争の際、薩摩軍の攻撃の2日前に天守閣が焼けてしまった（原因には諸説あり）。それ以来天守閣は再建されぬまま戦後を迎えた。ちなみに「薩摩軍の攻撃を50日間も城の中でしのぎ、政府軍の援軍を待って形勢逆転の砦となった」（ガイドのおじいさん）のもこの熊本城らしい。

★昭和35年、第1回国体が熊本で行われるのを機に、熊本城の天守閣を再建しようということになった。そして建ったのが今の天守閣。鉄筋コンクリートのお城は「大林組が1億8千万でつくった偽物のお城」と、地元には不評らしい。「国体でお城が建った」あたりが面白い。

★城の全容を史実に基づき再建しようと、平成10～19年の間、市民から寄付を募り、再建工事を進めている。一口1万年以上寄付した方は「城主」となり、名を記したお札が掲示される。「今年に入って1億円寄付した90歳前後の老夫婦がいて大きな話題になった」とのこと。

とまあこんな様子でした。

今回は出張サロンin「大分」というよりも「九州」という感じでした。これからも時間の許す限り、こうして各地を訪れながら、パワーを戴きつつ、ネットワークを広げていきたいと思っています。今後ともよろしくお願いします。

以上